
蒼天に咲く花

結人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼天に咲く花

【Nコード】

N7234A

【作者名】

結人

【あらすじ】

龍の里を治める若き長、修龍の苦悩。長の兄として修龍を支える礼龍。二人の目の前には美しい花が咲いていた。蒼い草原に凜と咲く一厘の花、テグツェツェグ。住まう場所・生き方・考え方。三人の生き様が糸の様に絡み合う……

第一章　芽生え

大陸東方にある龍の里から北方にある山道を抜け、青々と広がっている草原の中で二人の男が馬を並べていた。

一人は二十代後半といったところだろうか？

少々神経質そうなほっそりとした容姿に似合わず、その瞳は燃えるような真紅の瞳をしている。龍の里に住む龍族特有の瞳の色である。

「あゝあ、かったるいな。大体、俺が来なくたって兄上が話をまとめてくれれば十分だろう？」

ほっそりとした男の隣にいた、まだどこかあどけなさが抜けない少年、いや、青年というべきだろうか？

隣にいる兄に話かける男は馬上で大きく気だるそうにあくびをした。

兄とは対照的で太陽のように強く明るい輝きを持つ。龍族特有の真紅の瞳はじつと草原のかなたを見つめていた。

「いい加減にしろ、修龍。お前はもう龍族の長になったのだぞ。立場をわきまえろ。草原の民

結べば里はさらに安泰だ。そのためにはお前と草原の民の頭領の娘との結婚は大事だと何度も

言っただろう？」

「俺はべつに長になりたかったわけじゃない。ただ宝珠を持っているだけで長になるなんて馬鹿らしい。俺なんかよりも兄上が長になった方がよっぽどマシなんじゃないの？　大体、会ったこともない女と結婚なんて御免だな。兄上が結婚すればいいじゃないか。」

劉家の血筋と草原のハーンの血筋が結べばそれでことがすむんだろ？」

「修龍！」

兄、礼龍は修龍を怒鳴りつけ、にらみつける。

「わかってるよ。すべては里のため。俺の気持ちは二の次、いや、お構いなしなんだからな」

「修龍……これはお前の運命なんだよ。お前は長になるために生まれた。いい加減、観念したらどうだ？ 早く私を安心させる長になつてくれ」

礼龍は隣で不貞腐れる弟の群青色の髪をくしゃりと撫でる。

自由奔放な修龍の性格は時折、真面目な礼龍を苛立たせる。宝珠の有無、たったそれだけのことで長が決まってしまう。

この先、修龍が長として龍族をまとめていけるのか……礼龍はその真紅の眼差しの上に不安の色を濃く表していた。

「はぁ。気が重いな……兄上、あっちに泉が見える。少し休もうぜ」

「しょうがない奴だなあ。まあいい。一休みするか」

しぶしぶと承諾する兄を横目に、修龍は馬の腹を蹴り、泉に向かって駆け出していった。

「やれやれ、困った長様だ……」

礼龍は苦笑いを浮かべながら弟の後を追いかけた。

同じ劉家に生まれながら二人の立場を分けたのは龍の宝珠。

少し歳のはなれたやんちゃな弟の面倒をずっと見てきた礼龍は少なからず不安を覚えていた。

”長のあるべき姿とは……このままで良いのだろうか……”と。

泉のそばで馬をとめ、木に繋ぐ。

「おゝっ、良い場所だ。ちったあ息抜きしないとな。兄上が一緒じや堅苦しくってやってらんねえや」

爽やかな冷たく心地よい風が草むらにごろりと横たわる修龍の頬を撫でる。

修龍は己の右掌を天にかざしてじっと見つめた。

この右掌に宿る宝珠は修龍から”自由”を奪った。

龍族の長になるために生まれてきたと幼い頃から周りの大人たちにうるさく言われてきた。

「俺は何なんだろうな……これさえなければ自由にどこまでも行けるのに……つまんねえ人生」

修龍はかざしていた右掌を拳に変えて、強く地面に叩きつけた。

すべては里のため、自分のために生きることが周りの者が許さない。

今もこうして見知らぬ女と結ばなければならない羽目になった。

「あゝあ、男十八。遊びたい盛りなのに自由に恋愛の一つや二つもできないなんて、可愛そうな俺……」

修龍は嘲笑する。

力を持って生まれたから出来ることがある。

力を持って生まれたから諦めたことも沢山ある。

得たものも失ったものも……

自分は何のために生きるのか……

苦悩する若い修龍の耳に澄んだ笛の音が流れこんで来た。

泉の水と同じくらいに澄んだ音色は修龍の心に染み渡り、安らぎをもたらず。

修龍は笛の音色に耳を傾けながら、音が流れてくる方向に人影を探した。

大木の陰にはかなげな人の気配がする。

修龍は音を立てないようにそっと立ち上がり、その人の気配の持ち主を一目見ようと大木へ近づいた。

”花だ”

思わず息を飲み込んだ。

修龍の目に映った一輪の花。

泉から吹く風に濃紺の髪をさらりと揺らしながら澄んだ音色を風に乗せている、目の前にいる少女はまさに花そのものだった。

緑の草原に凜と咲く一厘の花。

修龍は呼吸するのも忘れ、笛の音が止むまで彼女を見つめていた。

笛の音を止めた彼女は修龍の気配に気づいたのか、その真紅の瞳を修龍に向ける。

微笑を浮かべる彼女の穏やかな空気に、修龍も笑みを浮かべる。

「あんた、すげえ笛が上手いんだな。そこまでの名手は大陸中探してもそうそう見つかるもんじゃない」

少女は何も答えずに静かに微笑を浮かべている。

「そのいでたちは草原の民だよな？　草原の民の女はあんたみたいな美人が多いのか？」

やはり少女は何も答えずに相変わらず微笑を浮かべている。

「せっかくだから何か話をしようよ。もしかして警戒してる？　大丈夫、俺は何もしない。これでも嫁さんもらいに来た身だから、その前に気に入った女をつまみ食いしようなんて考えていないよ」

にっと歯を見せて笑う修龍をみて、少女は眉をひそめた。

表情を曇らせる少女をよそに修龍は笑いながら質問攻めを続ける。

草原の民には独自の言葉がある。

もしかしたらこの少女は自分の言うことを理解していないのかもしれないという思いが、修龍を饒舌にさせた。

「俺さ、会ったこともない女と結婚させられるんだよね。可哀想だと思わない？　俺も、相手の女も。」

お互いの家の為に物の様に扱われてんだぜ。……って、こんなことあんたに愚痴っても仕方がないよな」

相変わらず黙ったままの少女を見つめて修龍はため息をついた。

「せめて相手の女があんたみたいに美人であることを願うよ。そんな淡い期待したって罪じゃないよな？」

悪戯っぽく笑う修龍の目の前で少女は再び穏やかな微笑を浮かべていた。

「修龍！ そろそろ……」

急に泉の奥へと姿を消した修龍を探して礼龍が険しい顔をして現れた。

しかし、目の前にいる少女を見てその険しさが急速に失われていった。

ほんのりと顔を朱色に染める兄の顔を見て修龍は驚いた。

堅物の兄が年下の少女に見惚れている……

礼龍は弟の視線に気づき、わざとらしく小さく咳払いをして

「のんびり休んだだろう？ 相手をお待たせしては申し訳ない。行くぞ」

と足早に馬を繋いだ場所へと消えていった。

「ま、そういうことだから。残念だな。俺が普通の人だったらあなたの名前を聞き出して里へ連れて帰るんだけどな……」

修龍は寂しげにつぶやき、彼女に背を向け、静かに姿を消した。

泉の前で少女は一人佇んでいた。

その顔に穏やかな笑顔を浮かべながら彼女は手にしていた笛にそつと口付けをする。

「兄者には止められていたけど……確かめておいてよかった……」

少女は木陰に隠すように繋がれていた白い馬に跨り、草原の中へと駆け出していった。

日が傾きはじめ、空が茜色に染まる頃に修龍と礼龍は草原の民の頭領、バートル・ハーンと対座していた。

修龍は始終、あからさまに嫌悪の表情を顔に浮かべており、隣に座る礼龍をはらはらさせた。

「修龍殿はずいぶんとご機嫌が悪い様子だ。やはり田舎の一部族の娘が嫁ではご不満かな？」

「会ったこともない人に対して不満かどうかを言う道理はありません。しいて挙げるとすれば、我々に対する扱いが不満に思います」

修龍の発言に礼龍の背中には冷たい汗が流れた。

里と周辺部族を繋げるためにこの場を設けたというのに、それを壊しかねない修龍の言葉。場所が場所でなければすぐにでも修龍を殴り飛ばしていただろう。

バートルは修龍の言葉に嫌な顔一つせず静かに笑みを浮かべた。

「里から来た世間知らずな長殿は礼儀も弁えないとみえる。私は一応、貴方の義兄ということになる。少しは言葉を慎んではいかがかな？」

「義兄ね……妹の結婚相手、この劉修龍がそんなに信用できませんか？ この部屋の外にはざっと十数人の男が刀を持って貴方の声を待っているでしょう？ 狙いは私の首ですか？ 龍の宝珠ですか？」

修龍が涼しげな顔をバートルに向けると、バートルは景気よく大

きな笑い声をあげた。

「さすがは龍族の長、よく気がつきましたな。我々は狩をしながら生活しているので気配を消すことは造作もないことだが……見破られましたか」

「試されることはあまり好きではありません」

「申し訳ない。私にとってたった一人の大切な妹だ。劉家の者とはいえつまらない男の元へ嫁に出す気はなかった」

修龍はよほど面白くなかったのか、笑うバトルを目の前にしても眉間にしわを寄せたまま、そっぽを向く。

「気を悪くさせて申し訳ない。しかし、妹に会えば少しは機嫌も直ることだろう。私の自慢の妹だからな」

バトルは外へ向かって聴きなれない言葉で人を呼んだ。

おそらく妹の名前を呼んだのであろう。

色鮮やかな草原の民の民族衣装に身を包んだ少女が姿を現した。

修龍も礼龍もはっと息を呑み込んだ。

くすりと笑う少女の顔を修龍はまじまじと見つめ、驚くとともに、安堵する。

「改めて紹介しよう。妹のテグツエツエグだ。里の言葉に訳すと”天の花”という意味だ」

「天の花……」

修龍は目の前で咲く”天の花”に見惚れていた。

あの泉で会ったことは偶然ではなく、天命だったのだ……
修龍は初めて宝珠の力に感謝をしたい気分だった。

「では、私と礼龍殿はここで失礼させてもらう。後は二人でごゆるりと」

バートルは意味ありげな笑みを浮かべ、礼龍とともに部屋から出て行った。

「初めまして。天花と申します、修龍様」

改まって挨拶をする天花をみて修龍の顔が赤く染まる。

余計なことを沢山話してしまったせいかな、何を話していいのかわからなくなってしまったのだ。

「さっきはずいぶんとお喋りだったのに、まるで借りてきた猫のようになんて大人しくなるのですね」

「いや、あれは……君が俺の言葉がわからないと思ったから、ついうっかり余計なことを言ってしまった。失礼なことを言って申し訳ない」

「私は可哀想に見えますか？」

笑う天花にあわてて修龍は首を横に振る。

「いや、可哀想とは思わない……かな？　ただ、俺に嫁ぐのは大変だぞ。君はここから離れて里で生活しなきゃならない。言葉も習慣も風景も、ぜんぜん違う場所で暮らすことになるんだ。それでもいいのか？」

「修龍様は優しいのですね。私は大丈夫です。貴方は私のことを”物”としては見ないのでしょう？」

「もちろん。君は一人の人間だ。俺は一人の男として君の事を大切にする。まだ会ったばかりでなんともいえないけれど、君となら…：談恋愛しても楽しいと思う」

修龍の素直な言葉に天花がクスリと笑う。

笑う天花をみて修龍もまたクスリと笑う。

出会ったその日になんとなく惹かれてしまう彼女の魅力。

勝手に決められてしまった縁談だったが、彼女との生活、彼女と一緒に過ごすこれからの時間の長さを考えると、修龍は生まれて初めて右腕に宿る龍の宝珠に感謝したい気持ちになった。

この宝珠が初めて自分に微笑みかけてくれた…：

そんな気がしたのだった。

「そういえばさ、天花はいくつなの？」

「十六になりました」

「そっか、俺よりも二つ下なんだな。天花は好きな人とかいないのか？」

「そうですねえ…：今は目の前にいる方を好きになろうとしています」

修龍を真直ぐに見つめる天花の瞳が紅宝石のようにきらきらと輝いていた。

龍族特有の真紅の瞳がこんなにも綺麗だと思ったのは修龍にとって

初めてのことだった。

「天花、笛を吹いてくれないか？ さっき聴いた君の笛の音がもう一度聴きたい」

「はい」

天花は笛を取り出しその吹き穴そつと唇をつける。

修龍は笛の音に聴き入るよりも 音を紡ぎだすしなやかな指先と笛の音に息吹を吹き込む唇に見惚れていた。

天花の笛の音が壁を抜け、天蓋を超え、バートルと礼龍のいる部屋にまで響き渡る。

「良い音色ですね」

「妹のものです。我々はあまり笛を吹かぬのですがあれはどういうわけか笛の音を好む。今吹いている笛はあれが自分の手で作り上げたものです」

「ほう……多才なのですね。弟には出来すぎた方かもしれませんね」

礼龍は苦笑いを浮かべながら笛の音に耳を澄ます。

静かに流れる笛の旋律は礼龍の心に染み入り、波紋を残す。

抱いてはいけない感情と知りつつも、笛の音を紡ぎだす彼女の顔が脳裏でちらり、ちらりと見え隠れしていた。

「礼龍殿はご結婚なさらないのですか？」

「えっ？」

バトルの声で礼龍は我に返る。

「弟殿も一人立ちされたことだし、ここらで身を固めてはいかがかな？」

「弟はまだまだ半人前です。真の一人前になるまではのんびり嫁探しをしている暇ありません」

「礼龍殿は忠義者ですな」

忠義者……

自分に対する評価の言葉が妙に引っ掛かる。

何に対しての忠義なのか……

礼龍は眉間に皺を寄せながら流れる笛の旋律に心を委ねた。

自分と弟との実力の差は無い。

武術においては修龍の方が勝っているが、里を治める力は自分の方が勝っているはず。礼龍はひそかにそんな思いを胸のうちにしまっていた。

しかし、自由奔放な弟、修龍には人をひきつける何かがあった。

修龍の周りには必ずと言っていいほど人が集まってくる。

自分もそのうちの一人であることが礼龍にとっては腹立たしい。

「礼龍殿、せっかくのめでたい席にそのように難しい顔をしなくてもよいではありませんか。我々はこちらで一杯やっております」

にこりと笑う草原の民の頭領、バトル・ハーンもまた弟に魅せられた一人だった。

そして、あの花のように可憐に笑う彼女も……

この場に来るまでは始終不機嫌だった修龍は一転して機嫌の良さを全身からあふれ出させ、礼龍はさらに苛立ちの表情を見せていた。

「兄上、俺は初めてこの宝珠に感謝したい気分だよ。こんなに可愛い子とめぐり合わせてくれるなんてさ、粹な計らいしてくれるじゃないか」

「単純な奴だな……ま、これを機に少しは落ち着くことだ」

「大船に乗ったつもりで任せてくれよ」

「……泥舟じゃなきゃいいけどな」

「兄上はいちいち一言余計なんだよ」

いきり立つ修龍をなだめるかのように礼龍が頭をくしゃりと撫でる。

「やめろよく。もう子供じゃないんだからさ」

照れ笑いを浮かべる修龍のすぐ後ろで天花がクスリと笑っていた。彼女の顔を見るたびに礼龍の心は揺さぶられる。

「初めまして。天花と申します」

礼儀正しくお辞儀する彼女の体を抱きしめたい衝動に駆られる。顔を上げて礼龍に微笑む仕草が愛らしい。

「義兄上様、これからも宜しくお願いいたします。」

” 義兄 ”

天花は礼龍のことを義兄と呼んだ。

当たり前のことなのだが……なぜか義兄と言う響きが虚しく礼龍の心で響き渡る。

義兄ではなく名前で呼んで欲しい。

それで満足するだけにこの想いを胸のうちに押し留めておきたい。

「義兄上？どうかされましたか？」

「ああ、いや、なんでもない。修龍の相手をするのは大変だろうが仲良くやってくれ」

「はい」

嬉しそうに返事をする彼女を見て再び礼龍の心は揺れ動く。

花を摘み取ることは容易いことのはずなのに……目の前に咲くこの草原の天の花は簡単に摘み取らせてはくれないようだ。

「こちらの房子をお使いください。ゆっくりと旅の疲れを癒してくださいね」

微笑む天花に修龍と礼龍、劉家の二兄弟は天花の後姿が見えなくなるまで廊下でじっと見守っていた。

草原の夜は冷涼で澄んだ空気で覆われる。

柔らかい草の香りの中にごろりと体を横たえて天を仰ぐ礼龍がいた。

集落の中心広場では修龍と天花の婚約を祝って宴席が開かれていた。

もともと大勢の人の下で飲むことは好かない上、あの二人の幸せそうな笑顔を見ていると自分の胸が辛くなる。

酔いを醒ますという理由で席を離れ、一人、涼しい夜風に当たりながら満天の星を見つめていた。

酒で酔った火照りと共に心の隅に芽生え始めた熱も冷めて欲しいと願う。

「私にもまだこんな気持ちが残っていたのだな……」

礼龍がぽつりとつぶやいた。

「何してんの？　こんなところでさ」

「修龍！」

ひょっこりと姿を現した修龍に驚いて、礼龍はあわてて飛び起きた。

「私は酔いを醒ましていただけだ。お前こそ主賓がこんなところへ何をしに来た」

「兄上を探しに」

「私を？」

礼龍は照れ笑いを浮かべている修龍をいぶかしげに見つめる。

「だってさ、一番祝って欲しい人がいないんじゃないから」

修龍は酒の入った竹筒と杯を取り出し、二つの杯になみなみと酒

を注いだ。

「こうやって二人で飲むのって初めてじゃない？ 俺、こうやって兄上と酒を酌み交わしたいとずっと思ってた」

「毎日、嫌というほど顔をあわせているのに改めて二人で酒を酌み交わすこともないだろう」

「冷たいお言葉。可愛い弟の成長を祝ってよ」

ほろ酔いの修龍は薄紅色の顔をして倒れこむように礼龍に抱きついた。

「こら、何をする！ 弟に抱きつかれてもちっとも嬉しく無い。成長したと認めて欲しかったら、いい加減、甘えるのはやめろ」

「いいじゃん、たった二人きりの兄弟なんだし。それに兄上以外に甘えられる相手いないし」

修龍は子供のように歯を見せて笑う。

修龍の笑顔を見ると礼龍の胸はちくりと痛む。

この弟の笑顔を自らの手で壊そうとしている。

（今ならまだ傷は浅い。草原の涼風よ、私のこの火照った想いを酒の酔いと共に消し去ってくれ……）

礼龍は闇の中で煌々と輝く星にそっと祈った。

龍の里を取り巻く情勢は厳しく、里の肥沃な土地を狙って各部族が虎視眈々と機会を窺っていた。

修龍よりも三代前の長の時分、南に住まう砂漠の民、北に住まう草原の民、この二つの龍族が劉家の支配下から離れていった。

龍族の中心となる宝珠を持つ長が志半ばで、相次いで亡くなり、少数派の部族を押さえ込むだけの力は劉家にはなかった。

先代の長である修龍の父親もまた短命でこの世を去った。

まだ年若い修龍の両肩には龍の里に住まう龍族の将来が重くのかかっていた。

天花との結婚は草原の民との繋がりを保つための、いわば政略結婚だった。

まだ十八歳の修龍は己を取り巻く大人たちの思惑を知らないわけでもなかった。

それゆえにこれから里で暮らすことになる天花の身を案じていた。

「これで北方の情勢は少し落ち着くでしょう。玄武とも十分に対抗ができます。問題は南方の情勢です」

直属の部下が血気盛んに取り巻く状況を説明する中、修龍は呆々と窓の外を眺めていた。

大人の話が実にくだらしない。

地盤を固め、ゆくゆくは龍族のみならず他の部族をも従える強い国家を作る……

その頂点に立つ修龍にとっては強い国家などどうでも良いことだった。この土地で暮らすものが笑って暮らせるのならそれでよかった。

敢えて他の部族と戦を起こす真似をしたくはないし、己の右腕に宿る龍の宝珠は力で人をねじ伏せるためのものではなく、人を守る力を授けてくれるものだと思っている。

「あとは任せるよ。俺はちょっと外へ出る」

加熱する大人たちの論議の中、水を差すかのように修龍はふらりと立ちあがりその場から姿を消した。

離れたところでちらりと修龍の様子をうかがっていた礼龍は眉間に皺を寄せる。

話が他国の情勢に及ぶと修龍はいつもどこかへと姿をくらませてしまう。

「礼龍様、いくら修龍様が宝珠の力を持つ長とはいえ、いささか落ち着きが無さ過ぎるのではないのでしょうか？」

「すまん。あれの気まぐれは所帯を持っても直りそうも無い。その分、私が補佐をするから大目に見てやってくれ」

礼龍は苦笑いを浮かべ、窓の外をぼんやりと仰いだ。

「いっそのこと礼龍様が長になられてはいかがですか？」

何気なく上がった声に礼龍はどきりとする。

己が長になるということは実の弟と争うことになる。

長と器量が問われる修龍は血の繋がった、時には可愛いと思える弟に変わりはない。

「戯言を……私は修龍の補佐役で十分だ」

” 本心なのだろうか？ ”

そう自問しながら礼龍は苦笑いを浮かべたまま静かに答えた。

青々とした緑が生い茂る小川のほとりで修龍はごろりと横になり

蒼天を仰いでいた。

雲一つない天の景色の中、籐の籠を背負った少年が現われた。

「また抜け出してきたのですか？ 礼龍様にたっぷりと小言をいわれますよ」

利発そうな顔立ちをした少年はにこりと修龍に笑いかけた。

「元化か。お前こそこんなところで何をしている？ 勉強を抜け出してきたか？」

「やだなあ。修龍様と一緒にしないで下さいよ。葉草摘みです。ここは葉草が多く生息しておりますので」

元化は笑いながらくると背を向け、背負っている籐の籠を修龍に見せた。

修龍はそこから無造作に一枚の葉をつまみ、天へかざした。

「なあ、元化。俺は臆病者だろうか？」

「は？」

修龍よりも五つ年下の元化は意図がつかめず、きょとんとしながら修龍を見つめた。

「なんかさ、他国がどうのこうのとみんなが騒いでるけど……どうでもいい。俺は敢えて他の部族と争ってまで領土を広げたいとは思わない。」

この里で皆が笑って暮らしていければそれで十分だと思ってる。無駄な戦は好まない」

「私は政治的なことはわかりませんが……修龍様の考えは好きですよ」

元化はあどけない笑みを浮かべて修龍の手に使っていた薬草を己の手におさめ、籠へ入れる。

「それに、戦が起こればうちは忙しくなってしまう」

元化は里で代々医者を務める華家の跡取りで、元化自身も名医としてこの里で活躍しようと日々勉強に励んでいた。

「修龍様の奥方様になる方ってどんな人なのですか？」

「ああ、すげえ美人。笑うと可愛くてさ、笛が巧くて……って、なんだよ、お前、色気づいたのか？」

「ち、違いますよ」

元化は顔を赤くして首を激しく横に振る。

「奥方様が来れば赤ん坊が生まれるでしょう？ 私に取り上げさせてください」

「元化……」

ずっと横になっていた修龍が身を起こし、まじまじと元化を見つめる。

「修龍様の子供、僕が取り上げたいんだ。父様がいつも言ってる。

礼龍様と修龍様を自分の手で取り上げたことを誇りに思うって。だから僕も……次の長様になる子をこの手で取り上げたい。まだ若輩者だけど一生懸命勉強する。ね、いいでしょう？」

今まで丁寧な口調で話していた元化がやや興奮しながら素の口調になっていた。

修龍は口元に優しく笑みを浮かべ、身の丈が伸び始めた元化の頭を撫でる。

「わかった。兄上が反対しても俺はお前に頼むよ。って、まだまだ先の話だけだな」

「あと一年か……しっかり勉強しなくっちゃ」

「おい、一年って……気が早いだろう」

「そうですか？ でも夫婦になるからには男女の営みって当たり前のことでしょう？ 赤ん坊ができるのなんてすぐですよ」

元化は再びにこりとあどけない笑顔を浮かべた。

「つたく、妙なところで耳年増になりやがって。……まあ、いいか。そのうちお前にも天花を紹介するよ」

「はい。楽しみにしています」

元化は籠を背負いなおし、ぺこりと修龍に一瞥して来た道に戻っていた。

元化の背に向かって右手を振っていた修龍はふと手を止め、そのままじっと己のかざしている右手を見つめる。

次の長になる子、己と天花との間に生まれる男子の中に宝珠を持つて生まれてくる子が必ずいる。

生まれながらにして行くべき道を決められた子。

「俺の代で変えたいものだ……なりたい奴が長になればいいんだ」
修龍は不気味な足音が近づいていることをひしひしと感じ取っていた。

この先、この右腕に宿る龍の宝珠で何かが起こる。
漠然とだがそんな気がしていた。

第二章く雨曇りく

青い草原の中、白い影が颯爽と走り抜けていく。

頬を撫でる風と共に草と花をなびかせて走る白い影は、草原が森に変わるあたりで失速し、ゆっくりと木々の中へと姿を消した。

「ちょっと急いだから疲れたでしょう？　もう少ししたら泉があるから一緒に休もうね」

天花の手が愛馬の白い鬣をそっと撫でると、白馬は小さく頷くように鼻を鳴らした。

草原の民は男女を問わず乗馬の技術に長けている。馬と共に生きる、と言っても過言ではない。

天花をその背に乗せている白馬は天花自信の手で育ててきた”我が子”のような存在だった。

白馬は泉のほとりにいる人物と、葦毛の同胞を見つけて高く嘶いた。

「ちょっと、びっくりするじゃないの！」

静かな森の中から騒がしく姿を現した一人と一頭をみて葦毛の馬も高く嘶いた。

その横では葦毛の主がクスリと笑っていた。

「すごいな。天花が来た途端に薄暗い森が一気に明るくなったよ」

「それは褒め言葉ですか？　修龍様」

天花の体がふわりと馬上から宙に舞い、音もなく地に爪先が触れ

る。

「その”様” っての、やめて欲しいな。天花の前では一人のただの男でありたい」

「正直者ですね、修龍さ……」

「ほら、またつけようとしてる。俺は堅っ苦しいのは嫌いだ。天花は俺の嫁さんになるんだ。嫁さんに”様” 付けされたら始終気が休まらないよ。俺、気疲れで過労死だな」

悪戯っぽくニツと歯を見せて笑う修龍につられて、天花もクスリと笑い出した。

この目の前にいるあどけなさを残す少年が大陸でも戦闘に優れた部族、龍族の長だと誰が思うだろうか？

一見すると十八歳という歳の頃よりもやや幼さを残す、普通の少年と何ら変わらない。

修龍の手がクスクスと笑い続ける天花の頬にそっと触れた。

天花はぴくりと肩を震わせた。

明るく笑う修龍の手は見た目とは裏腹にごつごつと堅く、節くれだっていた。

苦勞を知る者の手。

天花はその手にそっと自分の手を重ねた。

「天花、俺は戦場へ行く」

「えっ？」

驚いて顔をあげ、見上げた修龍の顔には明るい笑いは消えていた。

「ちよつとなあ、盗賊共が徒党を組んで悪巧みしていやがる。言い換えれば大規模な盗賊狩りだ」

修龍の手が天花の頬から離れ、力強く天花の細身の体を抱き寄せた。

「和解ができればいいんだけどさ、それも難しくて実力行使だ。さつさと終わらせて必ず帰ってくる。だけど、もしかしたら……」

「その先は言わないで」

天花のほっそりとした人差し指が修龍の唇に触れ、その言葉を遮った。

「私は貴方の帰りを待っています。貴方が帰ってきたら私達は龍の里で婚礼を挙げる。そうでしょう？」

「あ……ああ、そうだ。俺、必ず帰ってくるから。そしたら婚礼だ。……でもさ」

「何？」

天花は不思議そうに小首をかしげる。

天花を抱く修龍の腕が痛いほど力がこもり、さらに強く抱きしめていた。

「抱きたい……」

短く囁くように修龍の口から零れ落ちた言葉は天花を大いに驚かせ、混乱させた。

「ごめん、いきなりこんなこと言って……けど、中途半端な気持ちで言ってるんじゃない。

婚礼を挙げれば君は龍族の長の妻だ。跡取りが生まれなければ俺は妾を娶らなきゃならない。全てが長としての行動で、俺の意思は関係なしなんだ……劉修龍として、ただ一人の男として……

テグツエツエグ、君を大切な恋人として抱きたい」

「修龍……」

二人の間にはそれ以上、言葉はなかった。

互いに互いを寄せ合い、惹きつけ合い、一つに重なっていった。

二人の鼓動の音が一つに重なっている。

森の中をやや冷たい風が吹き抜けても二人は冷たさを感じてはいなかった。

熱を帯びた鼓動を響かせながらも、二人の脳裏にはちらり、ちらりと一つの言葉が浮かんでいた。

” 今生の別れ ”

相手は訓練されていない盗賊とはいえ、戦場では何が起こるか計り知れない。

修龍の腕の中でその鼓動を聞きながら天花は小さく震えていた。

「心配しなくていいって。こう見えても意外に強いんだぜ、俺」

「修龍、さっき、私の名前を草原の言葉で呼んでくれたのは何故？」

天花は顔を修龍の胸にうずめたまま、小さく尋ねた。

「だって、君の名前、テグツェツェグ・ハーンだろう？ 別に普通のことじゃない？ どっちの名前で呼ばれたい？」

修龍は天花の髪を指に絡めながらにこりと微笑んだ。

「私は……里で暮らすのだから里の名前で」

今まで顔をうずめていた天花が初めて顔をあげ、真直ぐに修龍の瞳を見つめた。

その瞳の奥には何かを決意したような、強い光が宿っていた。
修龍は力をこめて天花を抱きしめる。

「ごめんな、なんか名前を奪っちゃうようなことになって」

「名前が変わっても私は私よ。中身が変わってしまうわけではないし……それに、里の言葉にただけだから」

「じゃあさ、俺にも草原の言葉で名前をつけてよ。俺ってどんな感じ？」

天花はじっと、修龍の姿すべてをなぞるように見つめた。

短く、黒に近い濃紺の髪。

透きとおる真紅の瞳。

その顔にはまだあどけなさを残し、それでいて逞しさもあり……

「ツアガン」

天花は短く一言、草原の言葉を口にした。

「ツアガン？　どういう意味？」

「白い……という意味です。修龍、貴方の心は純粹でまだ何色にも染まっていない”白”そのもの。だから……」

「ツアガン（白）か……良いな。俺たちの間に子供が出来たら、その子にも草原の名前をつけてやろう」

優しく抱き寄せる腕の中で天花はくすりと笑う。

「気が早いわ。男の子だったら”龍”の字を使わなければならないのでしょうか？　私が草原の民だから？」

「違うよ。俺の子供には俺と同じ思いをさせたくないんだ」

天花は修龍の言葉の意味がわからず小首をかしげた。

里の暮らしは草原の暮らしと違い、欲しい物は手に入る。ましてや長家の若君として育った修龍に一体何の不満を抱いているというのだろうか？

「俺さ、里の外を知らないんだ。ずっと縛り付けられて……たぶんこれからも。俺の跡を継ぐ子にはもっと色々なことを、外の世界のことを知って欲しいんだ。まずは母親である天花、君の育った草原の暮らしのことを。北の玄武、南の朱雀、西の白虎……他の部族のこともよく知って、共存できる術を見出せる長になって欲しい」

「修龍……貴方はまだ若いのだから、まだ時間があるでしょう？」

「ない。俺はもう既に長だから……自由に外へは出られない。でも、短命だった先代、先々代の長よりも長生きする自信がある。子供が一人前に成長するまで、しっかりと見届ける自信がある」

「修龍……」

やはり”ツアガン”なのだ……

子供のような表情をするかと思えば、急に大人びた顔をする。

この真っ白な心はこの先一体何色に染まるのか……

修龍はこれから戦場へと赴く。

その手を血の赤に染めたとき、彼の心は何色に染まってしまおうのか……

天花はただひたすら、修龍の鼓動にその身を委ねた。

触れ合う鉄の音がその場の緊張感を高める。

たかが盗賊。しかし、南の勢力に対抗するためにはこの盗賊の砦が目障りだった。

修龍にとっては初めて自ら指揮を取って挑む戦となる。修龍に不満を抱く者達にとっては器量を問う絶好の好機でもあった。

今後の行く末も兼ねた討伐に、人々の期待と不安が大きく渦巻く。

「修龍、これをしっかり頭に叩き込んでおけ」

礼龍の手から渡された地形図には何も記されている様子もなく、数本、線が引かれているだけだった。

きょとんとしながら地形図と向き合う修龍の頭を、ぽん、と礼龍が軽く叩いた。

「じきに暗くなる。今日は朔月夜、灯りは欠かせぬな」

「灯り？ ……火か」

修龍は慌てて近くにあった燭台に火を灯し、そっと地形図を炎にかざした。

白い布に墨を落としたかのように、白紙だった地形図はゆっくりとその姿を現した。

「何だこれ？ 向こうは丸裸のようなものじゃないか。こんな見通しの良いところに砦？」

「そうだ。その分、こちらの動きも丸見えだ。どうする？」

修龍は腕を組み、瞳を閉じた。

丸裸の相手に攻め入ることは簡単そうに見えて難しい。礼龍の言うとおりに、こちらの動きも丸見えな上、地中に罠が潜んでいないとは言いい切れない。

無理を通して攻め入れれば多くの犠牲者が出る。人口が減りつつある里の貴重な人材を無駄にはできない。

「兄上、やめておこう。無駄が多すぎる」

「修龍、お前、自分が何を言っているのかわかっているのか？」

修龍は眉一つ動かさずに掌の中で地形図を丸め、いきり立つ兄、礼龍に手渡した。

「わかっているさ。明日あたり、血気盛んな皆さんは俺のことを臆病者と罵るだろうな。だけど、今はまだ時期じゃない」

「ではいつ頃が時期だと思う？」

修龍は天井を仰いだ。

兄の問いに対する答えはとっくに見出していた。しかし、その答えを口に出せば目の前にいる兄は烈火の如く怒り出すだろう。

胸のうち全てを打ち明けるべきか、否か。

先程灯した燭台の炎のように、修龍の心は揺れていた。

「修龍？」

揺れ動く炎を吹き消すかのように、修龍に答えを催促する兄の声は修龍の思考を止めた。

何か言わなければ、この場から開放されそうにない。

天井から足元へと視線を落として

「まあ、そのうちに」

と短く答えると、兄に背中を向けた。

後ろから、落雷の轟音のような怒鳴り声が飛んできたが、耳を塞いで聞こえないふりをした。

すっかり日も落ち、墨をこぼしたように暗く、肌寒さが残る部屋で、礼龍は手にしていた地形図を卓の上に叩きつけた。

普段は物音一つしない礼龍の部屋には珍しく、壁中の書架に並べられた書物たちを振るわせるほどの大きな音が響いた。

怒りと失望が胸を締め付ける。

「何故だ。私が長の立場なら南の砂漠の民、北の草原の民を昔のよ

うに支配下に置き、劉家の権力回復に努める。劉家の権力が回復すれば民の心も落ち着き、力で守ることも出来る。それがこの里を安泰にする術ではないか」

礼龍はもう一度己の拳を卓の上に叩きつけた。

握り締めた掌からつうと一筋の血がこぼれ落ちる。

「修龍には何故それがわからんのだ」

「では、貴方が長の座に就けば良い」

「誰だ！」

礼龍は辺りを見回すが、部屋の中には人影も見えなければ、人の気配すら感じられなかった。礼龍の怒鳴り声に卓の隅に丸めて置かれていた書簡がころりと床へ落ちた。

眉間に皺を寄せながら怪訝そうに書簡を拾い上げると、再び礼龍に語りかける声が部屋に響いた。

闇に忍ぶ声。しゃがれ、どこか生気のない老人の、男のものとも女のものとも思える不思議な声音が礼龍の胸の奥底を貫いた。

「簡単なことだ。あれを殺せば貴方以外に長になれるものはおらぬ。全てが手に入るぞ。宝珠の力も、あの女も」

ぴくり、と微かに礼龍の肩が動いた。しかし、表情は仮面のようににも変わらず、ただじつと部屋の四隅を真紅の瞳で睨みつけていた。

「私を甘く見るな。そのような馬鹿げた誘いに容易く乗るほど愚かではない。どこの輩かはわからんが、早々に立ち去れ。さもないと

……」

礼龍は壁に掛けてあった剣を手に取り、素早く鞘から抜き取り、鋭く空を突いた。

薄い刃先が空気を震わせ、小さな鈴の音のような澄んだ音を部屋に響かせた。

「貴様の喉もとを一突きにしてやる」

「まあよい。今日のところは退こう」

不思議なしゃがれ声は喉の奥から搾り出されたような笑い声を残して消えた。

くくつという笑い声の余韻が修龍の耳に残る。

「くそっ、腹立たしい」

礼龍はもう一度、剣で空を斬り、辺りを見回してから鞘に収めた。

宝珠の力とあの女。

しゃがれ声の誘惑がぐるぐると礼龍の胸の中で渦巻いていた。

龍の里では唯一の診療所、華家の庵の中に修龍の姿があった。元化が修龍の目の前に淹れたての茶を置いた。

「修龍様、どうかされたのですか？」

目の前にある茶にも手を伸ばさず、押し黙ったままにいる修龍の

様子が気になるのか、元化は修龍の顔を覗きこんだ。

修龍の瞳は相変わらず澄んだ真紅の色をしているが、じっと床を見つめているのか、それとも床を通り越してどこか別の場所をみているのか、わからなかった。

元化の手が修龍の頬をそつと撫でたかと思えば、次の瞬間、何を思ったのかぎゅっとつねりあげた。

「いてっ！ 何するんだ！」

「ああ良かった。生きていらしたんですね。あんまり動かないから死んでいるのかと思いました」

元化はにこりと笑いながら修龍に茶を勧めた。

修龍は不機嫌そうに眉間に皺を寄せながらまだ湯気の立つ茶に手を伸ばした。

「修龍様、元気がないですね。また礼龍様と喧嘩でもしましたか？」

「まあ、そんなところだな。それ以上に、明日役場へ行くのが重い」

ほんのりと暖かく臓腑に染み入る茶と、部屋中に広がる薬草の香が少しずつ修龍に落ち着きを取り戻させた。

「俺は駄目だな。また兄上を怒らせちゃった。本当は兄上の期待に応えられるような長になりたいんだけど、どうにもな……一族や劉家の尊厳とか伝統とか栄達とか、俺にとっては二の次だ。この里で暮らす民の血を流してまで、大人たちが得ようとしている物は何なのか、俺には到底理解できない」

「じゃあ、皆にそう言えればいいじゃないですか」

「お子様は気楽でいいね。お前は簡単に言うけど、そんなに簡単に話が済めば俺は苦労しないって」

苦笑いを浮かべる修龍を元化は不思議そうに小首をかしげながら見つめた。

「どうしてですか？ 長様は修龍様でしょう？ 何を気兼ねしているのですか？」

「気兼ねか……」

修龍の脳裏に一人の顔が浮かぶ。

顔をあわせるたびに神経質そうな細い目をさらに細めて、眉間に皺を寄せるあの男。

常に影のように修龍の側に控え、叱咤しながら支え続けてくれるあの男。

一見すれば修龍とは歳が離れて見えるが、実はさほど歳は離れていない。

「俺は兄上とぶつかりたくないんだ。父上が亡くなってから必死に俺のことを育ててくれた兄上には感謝している。でも、考え方がどういうわけか違いすぎる」

里のことで口を開けば、必ずといって良いほど口論となる。

修龍と礼龍、お互いに里の行く末を案じ、将来のことを考えているはずなのだが、しまいにはどうしても口論となってしまう。

いつの頃からか、修龍は礼龍に対して胸のうちを明かすことが少なくなった。

恩ある兄と言い争うのは胸が痛む。兄に対しての気兼ねが修龍の

言葉に蓋をした。

「私はぶつかり合うことの出来る兄弟がいる修龍様が羨ましいですけどね」

元化がふわりと笑う。

元化には兄弟がいない。それ故に修龍のことを兄のように慕っていた。

修龍もまた自分のことを慕って後についてくる元化のことを弟のように可愛がり、武術の稽古をつけてやったり話し相手になったりしていた。

「修龍様、元気出して下さいよ。いつまでもしよげかえっているなんてらしくないです。壁にぶつかったら壊してでも先へ進む人が、こんな薬くさいところで暢気に茶を啜っている場合じゃないでしょう？」

「お前、俺のことを何だと思っているんだよ……でもまあ、そうだよな。先の道は自分で切り開かなきゃ、だよな」

修龍は茶の入った茶器を空にしてから、大きく伸びをした。

「俺は龍族の長だ。一族のためならどんな壁でも乗り越えてやるさ」

「そうですよ、その調子、その調子」

すっと立ち上がった修龍に向けて、元化は小さく手を打ち鳴らす。

小さな拍手が修龍の背中を押した。

修龍はぽんと元化の頭を一撫でして庵を出た。

華家の庵からは道が何本も伸びている。修龍は迷わず、役場へと真直ぐに伸びる道を選び歩き出した。

ああ、うるさいな。どいつもこいつも戦う話ばかりで……

修龍は眉間に皺を寄せながら役場に集まった大人たちの話の行く末をじっと見守っていた。

臆病者、盗賊など蹴散らしてしまえ。……という意見が大半を占め、修龍の意見に従おうという者はいなかった。

四面楚歌。

唯一の肉親、礼龍は意見を言わずひたすら沈黙を保っていた。

「長！ 盗賊ごときに何を怯んでおられるのですか。我々は大陸でも名高い武術を重んじる一族。ここで怯んでは名が廃ります」

「目の前にある盗賊の砦を放っておけというのですか？」

皆が口を開けば一様に同じことを繰り返し言い、耳を塞いでしまおうかと両手をわざとらしく頭の後ろで組みなおす修龍はちらりと礼龍の方を見た。

相変わらずだんまりで、修龍に助け舟を出そうともせず、かといって周りの大人たちと一緒に騒ぐわけでもない。

（兄上、俺の力量をはかろうとしているのか？）

修龍はぐると周りを見渡してから、右手でぎゅっと小さく拳を握った。辺りは相変わらず、攻めろ、攻めろと騒がしい。

修龍は大きく息を吸い込み、意を決した。

「皆がそこまで言うのなら仕方がない。行く気がある者は支度をしろ。出発は五日後だ」

そう一言、短く言うとはどよめきが起こる前にさっさと部屋から出て行った。

途中、ちらりと兄の様子を伺ってみたが、礼龍は相変わらず面のようになんの表情も浮かべないまま押し黙ったままだった。

修龍がいなくなった部屋で取り残された部屋から、ぽつり、ぽつりと人の声があがり、やがて大きなざわめきに変わった。

窓の外で馬の嘶きがひとつ、高く響いた。

（里の外へいってどうするつもりだ？ 風当たりが強くなるだけだぞ……）

面のように表情を変えなかった礼龍が初めて眉間にしわをよせた。

真っ蒼な空の下、緑色の海のように広がる草原に、まるで海の上に浮かぶ船のようにぽつり、ぽつりと簡素な人の家が並ぶ。

その中でもひととき大きな家の中、客人を招き入れた広間の真ん中で、頭に白い布を巻きつけた男が渋い顔をしていた。男の目の前にいるまだあどけなさを残す真紅の瞳の少年の言葉に少々戸惑っていたのだ。

「バトル様、お願いします。どうしてもあなたのお力添えが必要なのです」

バトルは目の前にいる少年、修龍の申し出になかなか首を縦に

振ることができなかった。

大切な妹が嫁ぐ相手とはいえ、大胆不敵な申し出は草原の民の棟梁であるバートル・ハーンをうならせた。

馬を五十頭欲しいと言い出したのだ。名馬と呼ばれるものではなく駄馬で言いという。

草原の民にとって、馬は切っても切り離すことのできない大切な家畜であり、財産である。たとえ駄馬とはいえ五十頭という数はいささか多すぎる。

「我々の持つ馬はどれも優駿だ。駄馬など一頭もおらぬ。一体、五十頭も何に使われるおつもりか？」

「人を生かすための糧といたします」

「馬を殺すというのか？」

「はい」

包み隠さずに物をいう修龍の態度に、バートルはすっかり吞まれてしまっていた。バートルはどうしたものかと小さく一つ、ため息をもらした。

無謀とも思えるこの義弟の策に身を委ねれば一体どのようなことが起こるだろうか、とバートルは瞳を閉じて脳裏に先々のことを浮かべてみた。

（悪くはない。一つ、この男の力量とやらを拝ませてもらおうか）

「修龍殿、望みどおり手を貸そう。しかし、里で生まれ育った貴方に五十頭もの馬群を一人で操るのは容易ではあるまい。そこで……」

「私が参ります」

凜とした声で天花が名乗りを上げ、静かに広間の中に入り、ごく自然に修龍の隣でひざをついた。

これにはバトルだけではなく修龍も驚いていた。

『テグツェツェグ、何を言う。お前は嫁入り前の娘ではないか。おとなしくここで修龍殿との婚礼の日を待っていれば良い。里へはオレが行く』

『いいえ。私が行きます。兄者、私を里へ行かせて。私は里で妻として修龍様のことを待っていたいの。お願い』

急に二人が草原の言葉で話し始めたため、何を言っているのかさっぱりわからない修龍は目を丸くしながら、二人の言い争う結末を見守っていた。

バトルが声を荒らげれば、負けじと天花の声も大きく、荒くなる。天花が声を荒らげると、バトルの声が小さくなり天花に圧倒されてしまう。

兄妹の言い争いをじっと見守っていた修龍はこらえきれずに、くすり、と笑い声をもらした。

修龍の笑い声を聞いた二人が、きつ、と振り向いた。

「これは失礼を。言葉がわからないのでどんな話をされていたのかは全くわからないのですが、お二人は仲の良い兄妹だなあとthinkまして」

修龍がにこりと微笑むと、バトルと天花の顔から険しさが消え、苦笑いが浮かんだ。

「里へは私が参ります。草原の民は女でも馬を自由自在に操ることが出来ますので」

天花に愛らしい笑顔が戻ったが、バートルは依然として苦笑いを浮かべていた。

前を進むのが修龍。

馬群を間に挟み、後ろから天花がついてくる。

修龍は何度も振り返り、豆粒のように小さく見える天花の姿に手を振った。

「えっ？」

修龍は一瞬、自分の目を疑った。

馬の背中の上を小さな人影が、ひらり、ひらりと飛び移り、次第に近づいてきた。

まるで花から花へと飛び移る胡蝶のようである。

馬の背をわたってきた天花は、最後にふわりと修龍の操る馬の背に、修龍の目の前に舞い降りた。

「危ないことするなあ。草原の民の成せる業ってやつか？」

「はい」

天花は屈託のない笑顔を浮かべた。

天花の濃紺の髪が修龍の鼻をくすぐった。ほのかに花の甘い香りがした。

「私、里へ降りるのはこれで二度目なの。本当に子供の頃だからあ

まり記憶にないけれど」

「まあ、記憶に残るほど垢抜けた場所でもないけどな。畑ばかり、あとは少し動物がいて、小規模な市があるだけだ」

「楽しみ。草原の集落には市がないから見てみたかったの。里の人の生活も全部」

「あまり期待しても落胆するだけかもしれないぞ。それよりも、後ろの馬たちは放っておいても大丈夫なのか？」

天花がこくりと頷いた。

修龍が心配そうに振り返ってみると、後ろに続く馬たちは相変わらず、ぞろぞろと修龍と天花の後ろについてきていた。一頭たりともはぐれずにぞろぞろとついてくる。

「この子達は頭が良いのよ。私たちの言うことだってちゃんとわかるの」

天花が微笑みながら修龍の茸毛の馬の頭を一撫でした。

我が子をいつくしむかのように、優しく馬を撫でる天花の手をみていた修龍が”ごめん”と言つぶやいた。

「時期尚早なんだ。俺に里の大人たちを納得させられるだけの實力があればこんなことをしなくてもいいのに……俺があの人たちを説き伏せるようになるにはまだまだ時間がかかる」

「修龍、そんな悲しそうな顔をしないで。修龍がそんな顔を見ると、ほら……」

天花はすつと天を指差した。

「空が泣き出しそうよ。この子たちも修龍の気持ちをよくわかっているわ。だからこうしてついて来てくれるの」

「ありがとう、天花」

修龍は手綱を握る右手をゆるめ、手綱の代わりに天花のほっそりとした腰を抱いた。

不機嫌な山の天候は肌寒い風を送り始めたが、修龍は掌にほんのりと暖かい草原の日差しのようなぬくもりを感じていた。

夕刻を過ぎ、橙色に染まった雲がいつそう厚さを増し、黒ずみ始めた頃、修龍の帰りをまだか、まだかと門口でうろうろと待っていた礼龍は、道の彼方から近づいてくる無数の影に驚いて目を見張った。

先頭を進む者は良く見覚えがある。礼龍の心配をよそに、暢気に大きく手を振っている。

「全く、何を暢気に手を振っているのやら……」

礼龍は苦笑いを浮かべながらも手を振って修龍に応えた。

が、大きく、二、三度振られた礼龍の手はすぐに握りこぶしに変わっていた。

（お気楽小僧め、少し灸をすえてやらねば）

とりあえず、庭先の掃除と薪割からやらせようか、それとも道場をくまなく掃除させようかとあれこれ思案を始めた礼龍ははっと息

を呑んだ。

「て、天花……殿?!」

思わぬ訪問者に礼龍は呆氣に取られていた。

「兄上、只今戻りました。ついでに婚約者殿も一緒に」

修龍は何食わぬ顔をしながら、ひらりと馬から降り、天花の手を取った。

「修龍、お前という奴は……」

ごつり、と鈍い音が響いた。

礼龍の握ったこぶしは予定通りに修龍の頭の上へと落とされた。

「ったあゝ。何すんだよ、いきなり!」

「何すんだよ、じゃないだろう。私がどれけ心配していたか……大体、何故、天花殿がここにいる? これからここは危険な場所になるとわかっていながら何を考えているのだ、お前は!」

「それは、天花が馬を……」

言い訳をしようとする修龍の前に天花が歩み出た。

にこりと笑顔を浮かべる天花を目の当たりにして、礼龍は顔をやや赤らめながら戸惑った。

「私が兄と修龍に無理を言って勝手について参りました。危ないことはいたしません。ここで修龍が無事に帰ってくるのを待っていた

いのです」

懇願する天花の真紅の瞳をみて、礼龍の胸がちくりと痛み出した。真紅の瞳には礼龍の姿が映し出されてはいるが、その瞳は修龍だけを映し出しているに違いない。

「とりあえず、屋敷の中へ。男所帯ゆえ、たいしたもてなしもできないが……」

礼龍は冷静を装って、天花を屋敷の中へと招き入れた。

天花の後に続いて屋敷に入ろうとする修龍の着物の襟首を礼龍が引っ張る。

驚いて振り返った修龍の瞳に映し出された兄、礼龍は不気味なほど静かに微笑を浮かべていた。

「あ、兄上？」

「まず、やることをやってもらうか。庭掃除に薪割り、道場の掃除、ついでに水汲みもしてこい！ 快点儿（早くしろ）！」

「は、はい！」

慌てて庭へ走る修龍の後ろ姿を心配そうに見守りながらも、天花がくすり、と笑いをこぼした。

こちらへ、と案内された屋敷の中は広いが、ひっそりとしていた。龍族の長家ともなれば、それ相応の使用人がいてもいいはずだが、修龍、礼龍、そして天花以外に人の気配は感じられなかった。

庭に面した廊下を通ると、ぶつぶつと文句を言いながらも黙々と薪割りをする修龍の姿があった。

礼龍が庭先にある椅子を指した。

「天花殿、そこに腰掛けて修龍の面白い姿でも眺めていてください。一族の長が薪割りや庭掃除をする姿は滅多に見られない光景だ。私は茶でも淹れてこよう」

「あ、私が……」

「天花殿は今日は客人。客人に渋い茶を出すような真似はいたしません。心配御無用」

礼龍が厨へと姿を消すと、天花は椅子に座り、薪を割る修龍の姿を眺めていた。

上半身を露にした修龍が、時折、天花の方をむいて微笑んだ。

鍛えられた修龍の体から振り下ろされる斧が快い音を立てて薪を次々と割っていく。

薪を割る快音にあわせて、天花はそつと笛を吹きはじめた。

一人、闇に包まれた自室に戻り、礼龍は深いため息をついた。

天花がここにいることは正直、嬉しくもあるが、同時に忘れようとしていた胸の痛みを呼び起こす。

客間の用意をしていなかったという口実で、天花は修龍の部屋にいる。夫婦になる仲なのだから、不自然ではないだろう。

「悔しかろう。弟にすべてを奪われて……」

「……またお前か。なぜここへ来る？」

数日前に聞いた、聞覚えのあるしゃがれ声が再び礼龍の部屋にこ

だました。

礼龍は数日前と同じように右手で剣の柄を握った。

「あれを殺せば楽になるぞ。あの娘もお前のものだ。この里も、宝珠の力も」

「黙れ！ そのような馬鹿げた誘惑に負けるほど、私の意志は弱くない」

「あの娘、今頃はお前の弟と……」

ぶん、と礼龍の剣がうなりをあげて空を切った。
手ごたえは全くない。

「見かけによらず、手が早い。龍の宝珠に選ばれなかったとはいえ、龍の子は龍か。我には見えるぞ、お前の腹のう치가。以外に野心家だな……」

「うるさい、黙れ！」

再び礼龍の剣がうなりをあげて空を切った。
今度は二度。

部屋の隅、暗闇が一層濃くなっている部分で、何かの影がゆらりと動いた。

「まあ良い。お前の腹のうちに潜む野心と我の思惑は似ている。また会おうぞ……」

「二度とくるな」

礼龍は部屋の隅に剣を投げつけた。

壁に剣が突き刺さるとともに、礼龍の行為を嘲り笑うかのように、遠くで雷鳴が響いた。

ぽつり、ぽつり、と雨の雫が屋根を叩き始めた。

礼龍の耳にもう一度、あの嫌なしゃがれ声が聞こえた。

「我が名はコントン。忘れるな……」

しゃがれ声が激しくなる雨音とともに高笑いをあげた。

「ふざけた名前を……コントン、渾沌だど？ 架空の妖の名を語って何になる」

礼龍は壁に突き刺さった剣を引き抜き、かちり、と鞘に収めた。

先ほど、遠くで響いた雷鳴が、すぐ近くで轟音を立てた。

雨は一層激しく屋根を、地面を叩き続けた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7234a/>

蒼天に咲く花

2010年12月31日02時21分発行